

感染症対策で果たすべき養護教諭の役割とは ～ 緊急時と通常時の感染症対策から～

伊丹市瑞穂小学校
主幹教諭 篠崎 葉子

1：取組の内容・方法および成果と考察

2020年1月、中国武漢から始まった新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）は瞬時に世界中に拡がり、今も日常生活や学校生活に大きな影響をもたらしている。コロナ以外にも2009年には新型インフルエンザ（現在は季節性インフルエンザとなっている）で1週間の休校措置を経験している。その他ノロウイルス感染症など学校生活において注意すべきものは多い。学校における感染症対策で養護教諭はどのような役割を持ち動いたらよいかを、コロナ対策における役割、あいうべ体操を中心に行った季節性インフルエンザの予防活動の二つの実践から考えていきたいと思う。

取組1 コロナ対策における役割（4月の動きを中心に） -

< 校内コロナ対策委員会の立ち上げ（感染症対策委員会） >

新年度の休校明け、新学期に子どもたちを学校に迎えるにあたり、どのような感染症対策をとれば安全・安心して登校できるのか、養護教諭一人で考えていても不安が募るだけだった。学校全体で考えないと対策はとれないと考え、対応の流れを表にまとめてみた。

日時	動き	内容
4月2日	職員研修：感染症対策（ノロウイルス・コロナウイルス）	ノロウイルスの処理方法の研修にコロナ対応を組み入れて行い、コロナ対応の基本の考え方を職員に伝える。（図1）研修の最後に職員に問いかけ、意見を聞いた（図2）ところ、職員から関係職員出席の対策委員会で検討しようという意見が出た。翌日の午前中から開始。
4月3日	校内対策委員会（午前）	関係職員で1日の学校生活に沿って対応を検討。 養護教諭の役割1（後述）
	養護教諭会（午後）	市内養護教諭会で校内対策委員会を立ち上げたことを報告。各校で対策委員会を立ち上げる必要性を伝える。
4月4日	養護教諭会へ情報発信	管理職の許可を得て本校の対策委員会での内容を市内養護教諭にメールにて送付。養護教諭の役割2（後述）

対応の基本の考え方

清潔区域：現在瑞穂小はコロナウイルスの発生がない……ウイルスに汚染されていない。

そのため下足室にてアルコール消毒を行い、学校に持ち込ませない。

下校時は家庭に持ち込みたくない児童はアルコール消毒をして下校する。

アルコール消毒は手指が濡れていると効果がさがる。濃度が薄くなるため。また追加の消毒液の配布は予定されていないのでむやみにアルコール消毒に頼ることは避けたいと考えてる。

図1

コロナウイルス対応で学校生活の中で 気になること 意見ををお願いします。

1 教室の移動方法

2 授業：例えば音楽の授業での歌・リコーダー・鍵盤ハーモニカをどうするか

3：給食当番や清掃方法 ふれあいタイムの遊び方

4：下校後の教室の消毒方法（次亜塩素酸ナトリウムでのふき取りなど）

5：各教科で配慮すること

図2

< 休校延長後、保健体育課との感染症対策のやり取りの窓口として >

今年度、養護教諭会の代表として感染症対策の疑問点・不安点を取りまとめ、市教育委員会保健体育課担当指導主事とやり取りを行った。保健体育課からの回答を市内メールで発

信することで各養護教諭が困っていることや疑問点などについての対応策を市内養護教諭で共有することができた。このようなやりとりは1回目を4月休校中に行い、2回目を分散登校開始時に行った。保健体育課との対応に窓口を置いたことは情報の錯綜を防ぎ情報の共有がスムーズに行うことにつながった。

<養護教諭の役割1（校内・対策委員会での役割）>

対策委員会での養護教諭の役割として、感染症に対する不安でどのような対応をとったらよいのかわからない職員に専門的な知識で対応すること。不安によって過度になりがちな感染症対策に理性的に対処すること。文部科学省「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～『学校の新しい生活様式』～」（以下、「学校の新しい生活様式」）をよく読んで学校で実現可能な対策を職員と共に考えること。養護教諭一人で考えた感染症対策では十分でないことを知り、学校生活の事は担任に、教科については専科教員に相談するのがよいということ。文科省や伊丹市の対策マニュアルを読んでも実際の学校生活で次々と出てくる対応の疑問や不安を受け止め取りまとめること。などがあると思う。

<養護教諭の役割2（保健体育課と市内養護教諭の間の取りまとめ）>

コロナ対応の危機管理において窓口として対応したことにより、市内の養護教諭の混乱を軽減できたと思う。校内の職員からの疑問を聞くたびに個々の養護教諭が保健体育課に問い合わせることは業務の多忙化と情報の錯綜をまねく。危機管理における情報の窓口の一本化と情報共有の重要性を実感した。

<振りかえって考察、そして今も対応は続く>

感染症の研修会が年度始めの2日目に計画されていたのは偶然だった。しかしその研修会の時に職員全体に疑問を投げかけることができ（図2）、その結果、職員から対策委員会を立ち上げようと意見がでた。それまでも個々に職員から対応に関する様々な意見を受けたり考えを聞かれたりしていたが、個人個人に対応しても感染症対策は改善しない。対策委員会の中で職員の疑問や不安そして意見を出し合い対策を検討することが職員間の合意を得るための必要なやり取りだったと思う。

現在も感染状況の変化に伴い更新される文部科学省「学校の新しい生活様式」と「伊丹市立学校園再開ガイドライン」の内容を照らし合わせ、必要な時に対策委員会が開かれる。感染レベルの変化に合わせて最善の対策を検討委員会で考え職員で実施することが、安心・安全な学校生活を守るために重要と考える。

取組2 - あいうべ体操でインフルエンザをやっつける！学級閉鎖ゼロを目指して -

<きっかけはPTAからの相談から>

2016年の夏休みに保健室へPTA執行部の方が保健室に来室する。前年度にインフルエンザによる学級閉鎖を7クラス実施していた。保護者から「出停期間が長くて学校の勉強の遅れが気になる。仕事を休むのも大変。隣の学校は学級閉鎖が少なかった。先生も勉強の進行がそろわないと困ると思う」などの理由から、あいうべ体操を取り入れてみてはという相談だった。学力向上委員会でも2015年度の欠席の多さが話題に上がったと聞いていた。加えて不登校傾向の児童がインフルエンザ出席停止明けからより一層の登校渋りになり出席明けに続けて休んだこと、今は登校できているが不登校に陥りやすい要素（遅刻が多い、月

に数回休むなど)を持っている児童にとり1週間の停止期間は新たな不登校のきっかけになることが私自身気になっていた。相談の結果、学力向上委員会とコラボレーションし、保健委員会活動であいうべ体操に取り組むことになった。

* あいうべ体操とは口呼吸を鼻呼吸に改善していく簡単な口の体操のこと。あいうべ体操を1日3回、1日計30回を目標に行い、舌や口の筋肉をきたえることで口呼吸の改善を促す。

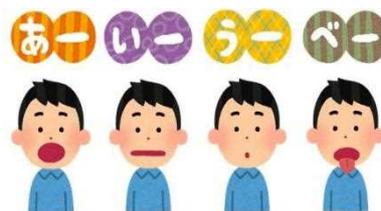


図3

<保健委員会活動の内容・経過>



図4

1年目(2016年度) : あいうべ体操を
 教えに保健委員が各教室に行く。 : 児童集会であいうべ体操を行う。
 : 全校にあいうべキャラクターを募集し大賞を決定する。(図4) :
 替え歌を作成し録音し休み時間に流す、と次々活動が広がっていった。
 2年目(2017年度) 1年目の活動に加え、 : スローガンを作成し下
 足室に書いて張り出す。 : あいうべキャラクターを募集し各クラス優
 秀作品を保健委員で選び表彰する。
 3年目(2018年度) 1年目の活動に加え、 : 保健委員会でクイズを
 作成し放送委員会に昼休みに放送してもらいクラス対抗クイズを行う。
 4年目(2019年度) : キャラクター募集は低学年対象とする。 : 高学年には健康川柳を
 募集。 : 低・高学年の優秀作品を選んで表彰するとともに下足室に張り出す。 : 「イン
 フルエンザの報告の木」を作り、下足室に設置。毎日のインフルエンザの欠席者を知らせる。
 : 保健委員であいうべ体操の保健だよりを作成。各クラスへ配布し啓発する。

<4年間のあいうべ体操の成果・考察>

- ・インフルエンザ罹患率が年々低下し、2019年度に学級閉鎖ゼロを実現した。
- ・毎年インフルエンザの流行時期にあいうべ体操を委員会の活動のメインにすることで、児童の中に定着していった。
- ・替え歌は毎年子どもたちで曲を決め作詞、録音。放送委員会に依頼し休み時間ごとに流した。放送委員会に依頼をする時は委員長が放送委員会に協力要請ができるように配慮した。役割を持ち活躍する場があると子どもたちが大きく成長すると感じる。
- ・替え歌を頻回に聞くことで子どもに意識付けされた。担任からも「歌を聞くことでちゃんとしようとして子どもたちが意識している」などの感想があった。簡単なメロディーにのせてメッセージを送ることで覚えやすく効果があると考え。毎年の恒例になり地域の方からも「子どもらしくていい」と感想をいただいた。
- ・委員会で最初にスローガンを決めることで達成

2018年度後期保健委員会 替え歌

メロディー：喜びの歌

- 1：あいうべ体操 しっかりやれば
 インフルエンザ・かぜもなくなるよ
 休み時間ごと しっかりやれば
 みんな毎日 元気に登校
- 2：インフルエンザを予防するには
 マスク・手洗い・うがいをするんだ
 1日30回を 目標にして
 毎日あいうべ しっかりやろう
- 3：インフルエンザになってしまうと
 楽しい行事ができなくなるよ
 テストもできずに一人で受ける
 だからあいうべをしっかりとやろう
- 4：学級閉鎖をなくすためには
 あいうべ体操 毎日やろう
 1日30回 朝昼晩に
 みんなであいうべ 休みをゼロに

するための活動内容を考える良いきっかけになる。「みんなが元気で学校に来るためにはどんな活動をしたらいいのか」と考え、働きかける。それは全校生の自分たちでやろうという気持ちに大きな影響を与えていると思う。

- ・経年で続けると低学年の時から活動を見ているのでやりたいという意見が出るようになった。あえて「毎年同じことを行うと飽きないかな」と問いかけると委員から新しい活動の意見が出てくるようになった。2019年度の「インフルエンザ報告の木」は話し合いの結果、「休みの人数を毎日お知らせしたらみんな意識する」という意見が出て始まった。これは職員からも休みを減らそうと活動する時に、全校の様子がよくわかってよいと意見ももらった。

<あいうべ体操で本当にインフルエンザにかかりにくくなったのか？>

表 1

インフルエンザ罹患率	色は学年カラー														
	2015			2016(あいうべ1年目)			2017(あいうべ2年目)			2018(あいうべ3年目)			2019(あいうべ4年目)		
	罹患人数	人数	罹患率	罹患人数	人数	罹患率	罹患人数	人数	罹患率	罹患人数	人数	罹患率	罹患人数	人数	罹患率
1年	47	122	38.5%	39	102	38.2%	43	102	42.2%	19	97	19.6%	6	84	7.1%
2年	31	98	31.6%	29	119	24.4%	41	104	39.4%	36	102	35.3%	5	95	5.3%
3年	46	106	43.4%	18	95	18.9%	40	121	33.1%	15	101	14.9%	21	97	21.6%
4年	16	106	15.1%	12	105	11.4%	34	99	34.3%	20	121	16.5%	5	104	4.8%
5年	39	107	36.4%	21	101	20.8%	19	106	17.9%	16	101	15.8%	10	115	8.7%
6年	29	122	23.8%	27	110	24.5%	17	104	16.3%	24	100	24.0%	11	96	11.5%
全校	208	661	31%	152	632	24.1%	194	621	31.2%	130	622	20.9%	58	591	9.8%
学級閉鎖数	7クラス			1クラス(6-1)			1クラス(2-3)			2クラス(2-1・3)			0クラス		

*12月～2月まで集計

2019年度は全国的にもインフルエンザの流行は小さかったが、本校の罹患率(表1)や学級閉鎖がなかったことを考え合わせると、効果があったと考えられる。また経年的にデータを見ると同じ子どもの罹患率が学年が上がるにつれて低くなる傾向がある。これもあいうべ体操を毎年委員会で取り組んだ成果だと考える。

2：課題及び今後の取組の方向

養護教諭は学校危機の様々な場面(ケガ・水泳指導時の事故・アレルギー・感染症・災害時など)で関わりを持つ。危機管理の目的は子どもの安心と命を守ることであると考え、これまで様々な場面を想定し計画・準備・シミュレーション訓練を実施してきた。しかしコロナ対策では想定外の事が多かった。今回のコロナ対応で、校内対策委員会での協議及び感染症対策の策定、市内各養護教諭並びに保健体育課との連携及び情報の共有の重要性を学んだ。今後、専門職としての自分自身の考えを再構築する必要があると考えている。まだまだコロナは続くため気を緩めずに職員と協力して対策を取って行きたいと思う。

あいうべ体操の取組は子どもたちに感染症の予防行動を身につけさせるためどのように働きかけるとよいのか考えるきっかけになった。予防行動を「1層：予防行動が身についている」「2層：1と3の中間」「3層：全く取り組まない」の3層に分けて考える。中間層は言われたら行動するが動機づけも弱く、習慣化されていない。この大多数を占める中間層にあいうべ体操は有効だった。毎日の委員会の活動が予防行動のスイッチに刺激として入り行動化できたと考える。

コロナもインフルエンザも予防が可能な感染症である。予防行動をしっかり身につけることは自分の命や他人の命を守ることにつながることを忘れずに平常時の学校生活に戻った時、保健委員会の子もたちと活動を続けていきたいと思う。